

【研究ノート】

介護福祉報道を巡るマスコミ社会学としての試論的研究 —出演作品の評価分析を通しての考察—

前 田 崇 博

【序論】

これまで、介護や社会福祉に関するテーマに関するテレビ番組に16回出演した。大半が介護を巡るテーマだが、この4年間の介護保険制度の改正や関連事件は多種多様で、それらを元に製作される私のプログラムはその時代を反映している。一度立ち止まって、時系列的に整理・記録し分析を試みるため、今回、研究ノートとして纏める形とした。特に、マスコミ社会学の領域では、介護についての報道姿勢に批判が集中している。3Kなどのネガティブ報道が若者離れを加速しているという仮説もあり、その面からも分析したい。

出演作品は、関西圏エリアで放映されている民放の『朝の情報バラティ番組』¹⁾と、同局の『夕方ニュース報道番組』²⁾である。詳細は『前田崇博テレビ出演一覧』³⁾としてgoo上で閲覧可能であるため、著作権等の様々な法令遵守を鑑み、放映されたプログラム内容のみを圧縮叙述形式で要約する。敢えてテレビ局や番組名、スタッフ並びに出演者の固有名詞、そして製作秘話等は全く記載しないように配慮する。

本論は試論という形で紙面での一般視聴者の声も紹介することにした。各番組放映後、私のフォロワーのような存在の方々からのご意見がメールで殺到する。また、地域住民の方々から様々な意見が寄せられる。さらに現場職員や学術関係者からの感想・ご助言も頂戴するのが慣習化しており、番組評価、視聴者の声として一部紹介する。

【本論】

1. 介護保険制度の抜本的見なおし議論の年—2014年—

2014年は、介護保険制度の歪が声高に叫ばれ出した年である。介護保険は2000年の開始以来3年ごとに小さな改正は実施されてきたが、必ずしも効果を発揮してきた訳ではなかった。特に、厚生労働省は、ネガティブな統計結果をいくつか公表している。

その一つが、介護保険制度のエースの一つである特別養護老人ホームに関する待機者の実態である。全国で52万人にものぼる高齢者が入所待ちをしていることを発表した。これまで数年待ちはあたり前で、「人生最後の宝くじ」と揶揄されてきたが、具体的に実数で示された訳である。全国の

入所定員が約50万人に対してそれ以上の方が待機されていることはセンセーショナルなことであった。そこで筆者は2つの番組の企画に協力することになる。

①朝の情報番組「老後の居場所」(5月26日)

特別養護老人ホームの人気の秘密を説明した。特に、入居一時金が0円という安価性と各中学校区にはほぼ1箇所あるという近接性、そしてそこで人生を全うできる終身性を強調した。また、体系的な介護が提供されていることを城南特別養護老人ホームのロケを通して伝える形となった。情報番組だけに特別養護老人ホームの長所を整理した紹介になった。視聴者の声としては「特別養護老人ホームの実態がよく分かった」等が多かった一方で、「うちのおじいちゃんは申請したのに却下されて待機もさせてくれない。なぜですか」という制度自体の難しさに起因した質問も多かった。

②夕方のニュース報道番組「特別養護老人ホームの待機者と要介護認定」(7月25日)

スタジオ収録で、報道番組だけに切り口が鋭く「介護難民が出る」という仮説に基づく構成。筆者はスタジオで、特別養護老人ホームに入れる対象者の条件を整理した。朝の情報番組での説明補足もお願いした。高齢者は「自立」、「要支援1-2」、「要介護1-5」の3つに状態区分される。特別養護老人ホームの入所対象者は現行「要介護1-5」であるが、来年度から「要介護3-5」の中重度の介護状態だけとなる。つまり、「要介護1-2」比較的介護が軽い者は対象から外れるとし、その数が17万人にのぼると説明した。換言すれば、この17万人は待機者ではなくなり難民化する図式となる。また、状態区分の根拠となる認定審査の70項目に及ぶ質問項目には「家族」や「収入などの経済状態」はなく、あくまでも高齢者個人の心身状態のみをチェックするドイツ方式の生物体としての個体評価であると力説した。その結果、高齢者が介護する「老老介護」世帯であっても、1人暮らしで貧困であっても関係ないことも付け加えた。さらに、認知症でも身体が動く人は軽目の判定が出るために徘徊される方の大半は特別養護老人ホームの入所対象とならないことも視聴者に伝えた。

放映後、視聴者から大反響があり、「勇気のある放送ありがとう」、「認定審査のからくりが分かった」という感謝の声もあったが「介護保険は高齢者をいじめたいのか」、「介護保険って、なんでそんなに冷たいの」、「福祉制度なので貧困世帯は救わないのか」等の制度・システムに対する怒りの声も多かった。

結果的に、この年の2番組は、介護保険制度を巡るムーブメントの中での説明プログラムの役割を果たしてくれた。また、好評に伴い、この2つの放送枠で特集は継続していくことになる。

2. 介護保険の大改革断行の年—2015年—

③朝の情報バラエティ番組『介護保険制度の春からの改正内容』（2月11日）

4月からの介護保険改正の予告解説を行った。

介護報酬2.27%減額による利用料金の値下げと、それに伴う小規模デイサービスの経営悪化を解説する。また、介護報酬を1点10円として計算する方法や新しく登場してきたサービスを2種類説明する。

一つは「サービス付き高齢者向け住宅」という介護付きのマンション。特別養護老人ホームの待機者や、非該当者のための受け皿として登場した経緯と本学の近隣のアミライフという事業者を紹介。

また「24時間対応の訪問介護看護」という北欧型のサービスも紹介。医療法人西中医学会。利用者には緊急通報用のペンダントが配布されており、24時間いつでも駆けつけられるサービスの臨場感溢れるロケも実施する。

放映後、2種類の新サービスに関する意見、主に値段についての質問が多かった。「介護保険制度の未来形ですね」という卒業生の感想が視聴者の声を集約している。

④朝の情報バラエティ番組「男性介護者-ケアメン」（9月14日）

介護者全体の31.8%は男性で、20年前より20ポイントも上昇していると説明を行った。属性割合は、夫と息子が約半数ずつで、僅かながら甥もいる。

介護される側も「息子の嫁」よりは気軽に何でも言える実子・配偶者に介護をして欲しいという調査結果がある。男性介護のマイナス点は、「抱え込み介護」「気合い介護」「育児・家事未経験介護」の3つに集約できる。自分ひとりで抱え込み、早く良くなって欲しいと気合いで素人リハビリテーションを押し付ける。しかも育児を経験していないので調理やおむつ交換のレベルが低い。

一方、プラス点は「仕事介護」、「パワー介護」「愛情介護・恩返し介護」といった側面である。男性は仕事として介護を捉えれば学習し介護の技術も向上する。またもともと体育会系、力自慢の方も多く、リフティングなどは女性より適性がある。また迷惑をかけた母親や妻に対する恩返しとして介護を頑張るという側面もある。

但し、男性が介護のために仕事を辞めると「介護貧困」という状況に陥る場合もある。現在経済的な支援は「家族介護慰労金制度」のみで金額も1万円前後と少ない。これでは金銭的な面からも介護共倒れになると警告することにした。

⑤朝の情報バラエティ番組「高齢者の貧困」（10月5日）

介護問題を取り上げる前回の継続企画である。今回は具体的な「介護貧困」と大阪府の貧困対策について説明する。

平成25年度の調査結果でサラリーマンの場合は厚生年金部分が約14.5万円になり、国民年金約5.4

万円とあわせれば合計約20万円になる。ただこれは継続勤務の場合で、欠格期間があると減額されるなどの厳しい法則を説明する。また、「介護貧困」、つまり介護をすることによる経済的生活困窮である。在宅介護で平均4～5万円が月額となる。最も重い要介護5の場合は7～8万円かかるため国民年金の受給額を上回っている。

筆者が創設メンバーの1人でもある「生活困窮者レスキュー」という大阪府社会福祉協議会の事業を紹介する。制度ではなく福祉施設からの寄付により設立・運営されている大阪府独自のもので、対象者は公的制度の要件に合わず支援が受けられない人が中心である。貧困世帯に現物給付（買い物支援）等をする。

3. 介護保険制度の歪み、モラルハザード、そして介護教育—2016年—

新しい介護保険制度が軌道に乗るものの、人材不足が顕著になる。

また、虐待事件も多発、介護業務における倫理が問題となる。結果的に、介護保険制度の光と闇、両面を放送することになる。

⑥タ方のニュース報道番組「特別養護老人ホーム待機者と介護福祉士養成校」（1月6日）

介護保険制度の改革により、要介護1、2は対象外となる。そのため、特別養護老人ホームの待機者は激減し、空き部屋のある施設も登場してきている。また、マスコミのネガティブ報道の影響で介護福祉士養成校の学生減少も加速化していく。その実態を城南特別養護老人ホーム、そして本学人間福祉学科でロケ協力し説明する。特別養護老人ホームの空き部屋、半分埋まらない教室などの寂寥感溢れる映像となったが、生き生きとした介護の演習授業の風景も放映される。

放映後、意外にも好評価の声が多かった。「特別養護老人ホーム併設の学校」、「学校がバックアップしている特別養護老人ホーム」という教育と福祉の城南をアピールする結果となり、学生や入所希望者が増える皮肉な形となる。実態を包みかくさず放映する報道の社会的影響力を痛感する結果となった。

⑦タ方のニュース報道番組「虐待防止授業」（2月18日）

川崎市の老人ホームで入居者3人がベランダから転落死した事件が勃発、その後他の職員による集団暴行事件へと発達してしまった。連日、各局が虐待について特集を組む。介護の職場環境の劣悪さの報道が相次ぐ。

その中で、「虐待ゼロを目指した貴学の授業を放映したい」との要望がある。実は、虐待防止授業については放映の6か月前からロケがスタートしていた。特に、筆者がボランティアで開設している虐待加害者の矯正教室にはカメラなしでディレクターが参加する熱の入れようであった。まさに満をじしての放映となった。

学生の虐待目撃証言、虐待の告白、身体拘束の巧妙な技術、介護職員によるいじめのロールプレイ等、本学のリスクマネジメント授業の全てを盛り込む形となった。

また、筆者の持論である「離職率が20%を超える施設には虐待が多い」、「仕事に誇りを持つと介護に尊厳が生まれる」というインタビュー場面も挿入された。

放映後、自治体や社会福祉法人からの問い合わせが50件を超える。人権や倫理の研修の教材にしたい旨が大半であった。本学の授業を柱に構成されていて、現在も広報的な役割と機能を持つソフトとして活用させてもらっている。

⑧朝の情報バラエティ番組「老人ホームの賢い選び方」(3月21日)

出演者との質疑応答をメインにする目的でスタジオ収録する。端的な解説を目指して、老人ホーム3類型化する。公的な施設で介護保険を活用したいという人は特別養護老人ホーム、お金がかかっても良い人は民間の有料老人ホーム、そしてプライバシーは守りたいが安心も欲しいという人はサービス付き高齢者向け住宅。入居一時金や待機期間の比較解説をする。ポイントとして食事のチェックを推奨する。

入所前に、本人または家族は次のような質問をするよう教示した。パンフレットに載っている食事はいつの写真なのか。洋食が多すぎないか。好き嫌いが激しいけど選択や変更はできるのかや職員の1日の体制等である。特に「夜にしんどくなったらどうなりますか?」は良い質問として強調、夜間に職員が誰もいない施設もあることを説明する。さらに認知症になったら出てくださいと言われてないか等の退所理由の確認も進める。データの的には、介護離職率0~10%や介護福祉士などの国家資格者の割合が高い施設が優良と解説する。

放映後、「よく分かった」という視聴者の声が殺到する結果となる。続編を望む希望者も多かった。その反面「おかげでうちの施設は劣悪のレッテルを貼られた」「なんで老人ホームの内幕をばらすのか。迷惑や」という類の匿名電話が数本ある。祝日の放映で啓発効果抜群であった。攻撃的な匿名電話は正直不気味だが、ブラック経営の施設の存在を証明することにもなり、これ以降の筆者の社会正義による番組づくりの契機にもなる。

⑨朝の情報バラエティ番組「介護にまつわるお金の事情」(8月1日)

「介護難民」や「介護貧困」の続編的な企画として放映される。

特に、介護が受けたいにも関わらず受けられない介護難民を生み出しているのが、介護職員の不足という問題である。介護が必要な人の数は年々増え続けすでに620万人を超えている。介護保険がスタートした2000年と比べると2.8倍。それに対して介護職員の数は約170万人で需要に追いついていない現状がある。厚生労働省の資料では介護職員の給料は常勤で21万9700円しかなく、全産業平均では32万9600円なので10万円も低いことを説明する。

また介護に関する負担も増える傾向にある。ある高齢者世帯のインタビュー場面で具体的に説明

する。その世帯では月に訪問リハビリ約3600円、デイサービス約8500円がかかる。一般に在宅介護にかかるお金の平均は3万円、これにタクシー代などがはいる、全部で6～7万円かかるとも言われている。

介護産業の規模は介護保険がスタートした2000年は3兆円市場だったが現在は9兆円の巨大市場になっている。但し、介護保険制度自体が税金や保険料で運営されているため、政府が「介護報酬」という給料のもとになる数字を調整する裁量権がある。サービス利用料の高騰を防ぐために、介護職員の給料が低く設定されて、結局全職種平均よりも約10万円低いという仕組みを説明する。

その他、介護福祉士の特別手当や介護休業制度の補足説明もした。

放映後、意見の大半は「介護職員の給与が安い&介護の利用料金が高い」という二つのジレンマについてである。介護保険制度に構造的な欠陥があるのではという意見も多い。ニュース報道番組的な構成で朝からシビアな問題提起ができたのでは自負している。最後に、有名イケメンタレントが介護職員に対してエールを送ったことに感動する意見が多く、バラエティ番組としてのアイデンティティも崩れなかった。

⑩朝の情報バラエティ番組「サービス付高齢者向け住宅」(10月24日)

サービス付き高齢者向け住宅の解説。賃貸マンション形態で、24時間365日誰かに連絡できる体制となっている。賃料は通常のマンションより少し高い程度で介護サービスはオプションでつけられると説明する。共有スペースでは職員と入居者が談笑できるシェアハウスのような内容でもある。部屋ですっと過ごすことも可能で、必要な時は介護サービスを受けたり職員に相談もできる。料金は駅に近いと高いが、郊外に行くとなくなる。大阪なら家賃10～15万円、東京なら15～30万円が基本となる。敷金は大阪は0～50万円となっている。現在は全国で20万戸を超えており、1割の2万戸が大阪にあり、大阪の実戸数は東京を抜いて全国一である。昨今のサービス付き高齢者向け住宅の人気の秘密は、24時間見守ってもらえる安心感と有料老人ホームに比べやすいこと。また開放感があることとし、自由度が高く好きに過ごせることやトラブルがあれば、いつでも出ていけることだと強調する。また、珍しい高級な事例も紹介する。レストランにはグランドピアノ、共有スペースも一流ホテルのような設えで豪華な雰囲気である。加えて看護職も24時間常駐して医療体制も安心な環境になっている。料金は個室タイプの毎月払いのプランで家賃・共益費・食費などをあわせておよそ46万円という情報も提供する。ただ劣悪施設もあるので、選ぶ時は夜間に誰と連絡がつくのかを確認したり、過剰オプションがないか等の見極め方を伝える。

放映後、理解度が進んだ等の好意的な意見が多数寄せられる。その一方で、サービス付き高齢者向け住宅におけるネグレクトの虐待例を通報してくる視聴者も複数おり、長短を説明した意味を再確認する。

⑪タ方のニュース報道番組「サービス付き高齢者向け住宅」(12月8日)

⑩との連携関連プログラムである。特に⑩の放映後の意見を参考に、サービス付き高齢者向け住宅の短所、モラルハザードについて焦点を当てる。

大阪市東住吉区の二つのサービス付き高齢者向け住宅の比較検討を行う。一つは学生マンション型の構造で、私物の持ち込みは自由、部屋に自分専用のトイレも完備され、入り口のドアは中から鍵をかけることもできるなど自室が再現できる工夫がある。生活保護を受けている方は、生活保護費約12万円を入居費に充てて生活している。筆者は、サービス付き高齢者向け住宅の大きな利点は孤独死しないマンションであることを力説した。もう一つ、同区内で病院が運営するサービス付き高齢者向け住宅も紹介する。医療サービスを自由に選択することができ、介護職員が24時間巡回する手厚さを強調する。

一方、生活保護受給者が約3割を占める西成区では「貧困ビジネス」を生業とする劣悪なものも登場、生活保護対象者を狙った利益第一主義の悪徳業者がはびこっている現状を潜入口けーションする。サービス付き高齢者向け住宅はバリアフリーである程度の広さを確保し、日中に安否確認などをするスタッフを置けば、基本登録が可能となる。そのため、食事・医療・介護などのサービスはオプション制となり不要なサービスを雪だるま式につけてくる。「囲い込み」「介護漬け」と呼ばれるモラルハザードである。

放映後、様々な意見が多数寄せられる。特に、優秀・優良なサービス付き高齢者向け住宅と貧困ビジネスとして暗躍しているサービス付き高齢者向け住宅の両側面を放映したことを称賛してくれた視聴者が多かった。特別養護老人ホームの実態説明の回と同じく、「正義感ぶって、ビジネスの内情をべらべら喋るな」という匿名電話もあったが、やはりブラック企業がはびこる実態であることを証明していることになる。この頃になると筆者自身、ジャーナリズムについて考えるようになり、告発番組の方向性などにもこだわりと強いモチベーションが出てきている。

4. 介護保険新時代へー2017年ー

⑫朝の情報バラエティ番組「介護保険の訪問型サービス」(4月3日)

筆者は、「もともと施設での介護が主流。特別養護老人ホームは待機がまだ多い、価格も高くなっている。高齢者自身が住み慣れた家や地域で暮らしたいという希望がある」と冒頭に指摘する。そして、在宅型サービスの3つの形態の説明をする。まずホームヘルプや訪問看護などの訪問型サービス、次に自宅で暮らしつつ近くにあるデイサービスなどに出向いてサービスを受ける通所型サービス。介護の度合いにあわせて自宅を改修・設備機器を購入するサービスである。ほとんど一般に知られていない4種の訪問型サービスを紹介する。

まず「介護タクシー」。自力で移動が困難な高齢者や障害者のための移動手段として運営されているタクシーだが介護保険対象のものとそうでないものに大別される。前者は1割負担で済むが、

通院などの目的に限定される。後者は自由度が高いが高価である。

次に「居宅療養管理指導」。簡単に言うと介護保険での往診である。医療行為ではなく、パトロール訪問と言われているモニタリングである。医師は月2回薬剤師週1回来てもらえる。今注目されているのが「配食サービス」である。ロケをした介護老人保健施設では昼食と夕食、365日年中無休で配達。保温容器に入れて届けられるが、利用者の安否確認にも有用で孤独死防止等でも期待されている。

さらに政府の強いバックアップがあるのは「訪問リハビリテーション」。施設での通所リハビリはなかなか難しい事情のある方の家を訪問してくれるサービスである。家の改装助言もあり、環境にあわせてリハビリができるのが特長である。

放映後「こんなに訪問型サービスがあるとは」の驚嘆の声が多数あった。特にマイナーな領域に追いやられていた4種のサービス関係者からは感謝の声もやはり数多く届く。社会的意義を感じるも行政の情報発信の責任についても考えてしまう。

⑬タ方の報道番組「新人介護福祉士の活躍」(4月26日)

本学の2年生Nの約半年の追跡取材と、就職後の新人としての日々をドキュメンタリータッチで描かれている。デイケアセンターで働くNの悪戦苦闘場面とスーパーバイザーからの厳しい指導場面と二人の信頼関係を柱としたものである。筆者は介護福祉士が増えない理由、現場の過酷さを説明、質の高い介護には人材が必要で、介護の最高位である介護福祉士の役割と任務について解説した。Nは、利用者のことを一番に考えられるような、介護の仕事は素晴らしいと介護の仕事を知らない人たちに伝えられるような介護福祉士になりたいなどと話した。

最後にキャスターが、国家資格である介護福祉士になるために大学などに行っている学生の数、2010年の約1万6000人と比べ2016年は約7700人と激減しているとボードで説明くださり、特に、増えない理由は待遇で、平均給与は24万円で全産業比で10万円低いと強調してくれる。

放映後、介護福祉士養成校等の教員から多数の意見が来る。「ネガティブキャンペーンでない介護福祉士の特集を初めて観た」「介護福祉士の仕事の説明で教材になる」という肯定的な意見と、「やはり、待遇が低いと締めるともったいない」「もう少しやりがいについての説明が必要」「入所施設での介護福祉士の醍醐味を放送して欲しかった」等の辛口意見もあった。

⑭全国ネット・プライムタイムのニュース報道番組「老人ホームの上部組織のモラルハザード」(6月18日)

筆者初の全国放送出演である。全国の大半の特別養護老人ホームやデイを束ねる巨大な連絡協議会の官僚接待問題に焦点を当てる。全国の施設からの会費で運営されているものの、接待自体に法的な問題はない。しかしながら、幹部の施設長・理事長クラスがかなり高額な接待を常習的に料亭で行ってきている。低賃金で活躍する介護福祉士達の上司である。この階層格差、いや麻痺した感

覚を指弾したく協力する。特に、その協会の会員法人での不満の声もしっかりロケすることができた。

放映後、称賛の声が多くほっと胸をなでおろした。実は、この団体の大阪府の部会とスーパーバイザー契約を結ぶなど筆者との関係が深かったのである。今は組織が複雑化して関係解消しているが内部告発的な内容に正直ジレンマがあった。正直、恩知らずとの批判が怖かった。「前田だから説得力があった」「あなたが協力しないと作れない特集」と全国各地の知人からのメールは勇気づけられた。

⑮朝の情報バラエティ番組「地域包括支援センター」(10月2日)

初の相談機関のみの特集。サービスの調整機関説明というこれまでで最も難解な内容である。要介護・要支援高齢者は630万人を超えているが、特別養護老人ホームなどの施設で介護を受けている人はそのうち15%にすぎない。また政府は数年前から「介護は在宅主体で」という方針を打ち出した。そのような在宅福祉・居宅介護時代の中核機関となるのが地域包括支援センターということを強調した。2006年の介護保険法の改正でこれからの時代に施設ではなく住み慣れた地域で介護を安心して受けられるよう地域包括支援センターを創設した経緯の説明と大阪市内の2つの地域包括支援センターを紹介した。

特にメリットとして対象が65歳以上であればその家族も含めて介護認定を受けていなくても無料相談できることや、介護以外の生活や虐待などに関しても幅広く対応してもらえること。また高度な相談対応のために3職種の専門職を配置することが義務付けられていて、主任ケアマネジャー、社会福祉士、保健師の役割と任務をロケを通す形で説明した。具体的には、ゴミ屋敷、健康体操、認知症対策、住宅相談等多岐に渡ることを表現できた。

放映後、やはり反響が大きかった。特にスタジオでメインキャスターが「恥ずかしながらこういうことがあるんだと全然知らなかったです」とコメントしたことへの共感的な意見が多く、今後の介護特集を作る上での方向性を暗示するものではないかと痛感した。

⑯朝の情報バラエティ番組「介護ロボット」(11月20日)

2018年4月から、介護ロボットが本格的に介護保険の対象になることが決まり、予告編的な情報提供。バーチャルリアリティとソーシャルロボットに焦点を絞る。

前者は、認知症の人が感じる心の世界をバーチャル映像で再現している。介護教育の新時代を予感させるハイテク教材である。

後者は、人型ロボット、コミュニケーション型ロボットと呼ばれるもので、AIまたはセンサーが組み込まれている。子どもをイメージしたテレノイド、アザラシ型のパロ、そして情報発信もするロボット「Pepper」を紹介した。特に、各施設の協力を得て、高齢者と触れ合う場面を中心にロケをする。一見、人形療法とも捉えられるが、認知症でない方がより触れ合う機会が多いことが既存のセラピーとは違う。そして男性が多いことも驚いた。換言すればロボットと認識されている方が大半で、ロボッ

トならではの接し方をされているのだ。職員には言えぬ不満を言い続けられる女性、ロボットのメカニズムに詳しい男性等、みな誇らしげである。つまり、ロボットと接することで各自の尊厳が守られているようにも見える。孫に自慢される方も多いとか。自宅よりも施設をハイソサエティ化する役割も担っているのかもしれない。介護の科学化だけでなく、介護施設の持つ暗いイメージを払拭する力もあることを説明した。

放映後、変な質問が相次いだ。「前田さんのインタビューはどこでロケされたのですか」

実は、今回初めて、学校の研究室や教室ではなく特別養護老人ホームの喫茶室での筆者インタビューをお願いした。ロボットのいる施設環境の臨場感にこだわった試行であったが概ね好評であった。

【終論】

16番組を整理してきたが、カテゴリー別に分類すると以下のようになる。

- ①社会資源…介護施設としては、特別養護老人ホーム、介護老人保健施設、ケアハウス（軽費老人ホーム）、有料老人ホーム、そして住宅ともみなされるサービス付き高齢者向け住宅。居宅介護サービスとして、訪問看護、訪問介護、訪問リハビリ、居宅療養管理指導、デイサービス、デイケアサービス、そして配食サービス、介護タクシー。そして、相談機関として地域包括支援センター、最新介護機器または新しい専門職として介護ロボットを紹介した。
- ②人としてのクローズアップ…サービス利用者として、男性介護者、老老介護世帯、認知症高齢者とその家族、介護うつ病の罹患歴のある介護者、生活保護世帯などである。一方、専門職として介護福祉士、社会福祉士、ケアマネジャー、医師、看護師、理学療法士、医療連携室相談員、本学の介護福祉士養成校の学生の授業風景などを紹介した。
- ③社会問題…介護認定の合理的冷酷性、高齢者虐待、介護貧困、介護離職、悪徳企業、そして接待問題等の社会現象、モラルハザード的なものを取り上げた。

今回は、研究ノートということでこの16タイトルの内容の概要リスト作成という形で終わりたい。そのため各因子分析や課題設定はまたの機会としたいが、最後に付記したことがある。

『ジャーナリズム』についてである。

一緒に仕事をさせてもらったディレクターや記者は報道コンセプトと放映意図を各企画で作成されて、筆者に依頼されてくる。筆者も1回目に関しては、教育系の批評家然とした役割を担えればと思って気楽に出演したが、2回目以降はジャーナリストとしての役割を求められてきた。換言すれば、テレビショッピングのように商品のセールスポイント説明だけでなく、サービスの長短、または問題をしっかり解説する役割である。そして最終的には、プロットのしっかりした『作品』が完成する。

このテレビ局は、その作品づくりの背景に視聴者の声・ニーズがあることを前提にしている。具

体的には介護サービスの良い面ばかり紹介するのではなく、問題点や短所も明確にして欲しい、という声に依拠しているのである。特に、関西では自分が被害者にならないよう教示して欲しいとの声が強。但し、そのような声に真摯に応える形で放送すると、前述したようなブラック業界からの反発も出てくる。マスコミュニケーションの功罪でもある。筆者としては、そこが私の出演する存在意義ではないかと考えるようになった。介護・福祉を利用されようとされている人は、少なからず疲弊・脆弱化している方が多く、弱みや悪徳企業からの罣も多い。その人達の真に欲してられる情報を問題点も包みかくさずお茶の間に届けることが私の社会的使命だと考えるようになった。

さらに、一つの番組ができるまでかなり期間をかける。スタッフと何回も勉強会をして少しずつ作り上げていく。かなり議論していき、エビデンスの観点から没企画になることも少なくない。最近ではその議論とともに、個人的に一般視聴者にも意見を聞いている。このテーマで放送するに当たり、どのような情報が欲しいのかのニーズ調査である。筆者は一般意見の代弁者、アドボケートとしての役割を果たしたいのかもしれない。

筆者はジャーナリストではない。教育者・研究者であるが、ただ正確なジャーナリズムのもと、有用な情報提供とともに、バイアスのない理解しやすいメッセージを常に届けていければと思う。テレビを通して『介護・福祉』について学んでもらうことが筆者の使命であると痛感している。

謝辞

これまで、出演や取材協力くださった方々、テレビ局のスタッフ、そして非常にリスクを伴うテレビ出演を快諾してくださっている理事長、学長、そして毎回放映後、超高感度のDVDを作成してくださる三輪文昭先生には心より感謝申し上げます。

【参考文献・サイト】

- 1) 朝の情報番組 <https://www.asahi.co.jp/ohaasa/>
- 2) 夕方の報道番組 <http://webnews.asahi.co.jp/cast/>
- 3) 前田崇博テレビ出演リスト <https://tvtopic.goo.ne.jp/kansai/cast/620713/>

(まえだ たかひろ：教授)

